LETTER TO THE EDITOR

これも「継承責任」だろうか

高江洲　義　矩

Do we have a responsibility to pass the custom of letter writing on to the next generation?

Yoshinori Takaesu

今ワープロで文字を叩いて、「継承責任」を書こうと思ったら、「敬称責任」（？）が真っ先に出てきてしまった。ワープロというのは、漢字の頻度選別優先の設定となっているので、キーボードの打ち込みでは音読みの漢字が次々と出てきて、それから該当する漢字を選別する仕組みとなっている。それで毎日同じ漢字を使っていると、ワープロも真っ先にいつもの漢字を出してくれて、すんなりとした文章作成となる。ところが、使う漢字が落ち着くまでは、とんでもない漢字が選ばれて出てくる。確かに便利ではあるが、「文は人なり」という文章作成の崇高な作業では、まだまだ原始的すぎる機械ではないか。文章を書き進んでいながら、次々と思いもよらないとっぴな漢字が出てきたり、考えもしなかった漢字が突然現れてくるたびに、つぶやくように「ちがう！」「ちがう！」を連発しながら、キーボードを打ち込むことが日常の習性となってしまっている。

昔ながらの「自分の手で文字を書く」というゆかしい文化は、はるか昔のこととなってしまうが、これはどうしたことだろうかと。

さて、そんなわけで、でっぱなから口上だけが長くなりますが、その「継承責任」のことである。いやはや何とも硬い文言である。同じように自己責任という用語もあるが、自己責任よりは継承責任の方がニュアンスも異なり、「そうか」、「そうか」となる。この責任（リスポンシビリティ）という言葉は、オバマ大統領も大統領選挙中に盛んに連発していたようだ。さらに、ケネディ大統領が「国民の皆さん、国家が皆さんに何かできるかということよりも、皆さんが国家のために何をなすべきかということがだいじであります」という主旨の名演説でも問われた言葉である。

ところで、継承責任といえば、重大な歴史事実の継承から、文化芸術の伝統、教育・教養、民族習慣、宗教的行事の伝承などと、実に多くのことにかかわりのある言葉ではあるが、ここでいう継承責任は、そんな、だいそれたことではなく、沖縄のささやかな日常生活にかかわる話で申し訳ない。

郷里に定住して二年余になるが、これまでは仕事の関係で、沖縄を離れて本土と外国を放浪せざるを得ないような人生の後半であった。四十数年前に歯科大学は出たが開業医になる機会を失し、大学での給料で教員と研究員を背負う生活となった。本来は衛生学・公衆衛生学専攻の徒である。それが外務省の中南米保健衛生調査と、その翌年からのボストンのハーヴァード大学フォーサイス研究所の有給専任研究員を三年半。その後また郷里沖縄とは反対の北の国の岩手医大での教員生

【著者連絡先】
〒904-2225　沖縄県うるま市喜屋武181-4-A
東京歯科大学名誉教授　高江洲義矩
TEL&FAX：098-974-6701
E-mail：takaesu@cba.att.ne.jp

活。そしてまた東京での教員生活で定年を迎えた半生であった。

しかしそんな人生の半ばの五十歳頃、からだに自信をなくして、もう人生の終わりのような予感がして、せっせと身近整理をしたことがあった。

ところが親の名づけのお陰なのか、七十歳の峠も越えてまだ生きていることに感謝するやら、我ながらあきれている始末でもある。私の「義矩」の「矩」の字が硬いので小学生の頃、父に「父ちゃん、ぼくの名前は難しいんだってよ」と訴えたことがあった。父は「そのうちわかるから」と一言。なるほど後で調べてみたら、論語の「……四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず。」の矩で、ようやく七十歳を超えて、やっと一人前の人間扱いとなった所以であると勝手に解釈して、長じてあらためて父に感謝した次第である。

ところで、本題の継承責任についてのことであるが、今頃になってあらためてウチナーンチュとして様ざまなことに気がついてきた。

まず、伝統芸能・芸術文化やスポーツ振興ではハイレベルに達してきていることに誇りを覚える。しかしその一方で、コミュニケーションのことであるが、伝統的な「ゆんたく」であることは懐かしさで嬉しいが、こと手紙やその他のコミュニケーション手段となると、一般論ではあるが、いまの沖縄はあまりにも本土や欧米の実情とちがい過ぎるような気がする。

もっとも、私自身若い頃からコミュニケーションが下手で、とくに本土や欧米の同僚・友人達にくらべると、いまもって忸怩たる思いで、反省しきりであるので、大きな声でいえる立場にはないが、それにしても沖縄の現状には、自分がウチナーンチュであるだけにどうしたものかと思うこの頃である。

たとえば、手紙の返事がないのは通常のことのようである。さらに、一般家庭の人に、こちらからＦＡＸを送るから、返事を送り返してほしいと頼むと、ＦＡＸが必要な業種や宣伝業を除いて、概してＦＡＸは受診するが、発信はしないという。面倒のようである。何かいまの沖縄の事情があるのだろうかと思う。Ｅメール（電子メール）となると、若い人たちは盛んであるが、中高年となると、沖縄ではかなり関心が薄い。それでいて将来の沖縄はＩＴ産業（電子産業）で、世界をリードするようになるというような口ぶりや報道が多いので、こちらが戸惑うばかりである。

そのような傾向は、日常の会話でも多い。ＴＶ情報の影響であろうか、会うたびに諸々の巷間の情報知識は相当に豊富のようで、しかも話し手の顔がまぶしいほどに、世情の情報について自信満々のような「断定的口調」の話となる。この「断定的」というところが、昔のウチナーンチュと極めて異なるような気がする。

そこに戸惑いを覚えるのは私一人であろうか。それはいまの沖縄の政治的経済的な複雑な世情のせいだろうと。

古い思い出話になるが。終戦直後のことである。私は小学生であったが、当時の郡島民政府知事の志喜屋孝信先生が父と交流があったよしみで、早朝から米軍高官の出迎えで勝連のホワイトビーチ軍港に出かける途中、わが家にしばしば立ち寄ることがあった。そのつど母はナーベーラの味噌汁などを差し上げたのであるが、志喜屋先生は必ずハガキで礼状を送ってこられた。

終戦直後の郵便事情での礼状である。那覇にいた伯父もハガキをたびたび送って励ましてくれた。昔のあの風習はどこへ行ってしまったのだろうか。

なーに、いまの世の中では、ハガキとか手紙は要らないんだよ、必要なことは電話で伝えている。手紙は好きな人がやればよいのだよと。そうであろうか。

いや、手紙によるコミュニケーションは、いまも変わりない世界共通の習慣である。どんなに電子機器が発達しても、世界中で心の伝えとして、思いの伝えとしていまなお盛んに用いられている。便利ではない。便利の反対である。

昔から手紙の書き方の類の本などで紹介されて

よく知られている文例「一筆啓上火の用心　お仙泣かすな馬肥やせ」は、戦国時代の武将で徳川家康に仕えた本田作左衛門重次が陣中から妻に宛てた手紙。短い中に家族への心配りのすべてが記されている。時代は変わって三十年ほど前の最近、キューバ革命でカストロ元首相の盟友であったチェ・ゲバラは、戦中にあっても克明な記録を残している。

それは若い頃からの彼の習慣であったといわれている。歴史の解説書では医師であったからであろうと記されている。

手紙はささやかな継承責任の一つではないか、この頃しきりに思うことである。